本多

藩鑑

七十三

内閣文庫
和書
三四六八二號
二八冊
一五六函
一一二架

内閣文庫
番號 和 34682
冊數 278(74)
函號 159 1

国立公文書館
National Archives of Japan

藩鑑卷之百十四目錄

ほ部二十六

中納言大輔藤原忠勝

国立公文書館
National Archives of Japan

内閣文庫

藩鑑卷之百十四

中務

中務大輔菊原忠勝八平八郎忠高の
長子なりしが福之助と云ひのち
平八郎と称せり天正十三年十二月
千貫代采地を賜り同十六年四月
従五位下に叙し中務大輔に任す

国立公文書館
National Archives of Japan

同十八年八月上総國大多喜城と
賜ひ十万石を領す慶長六年正月
大多喜とあらためて伊勢國桑
名城と賜ひ同十五年十月十八日
六十二歳にして卒す

一 永禄中
東照宮信長和睦したまひ
東照宮清洲へ出盟ひたまふ此供百餘騎
なり清洲城門に入せたまふころ信長の
士卒皆
神君供奉の外装を見んとて立騎さ
けるに多忠勝十四歳馬前に立長刀を振
て罵りけるは
元康等に出たり海道筋礼何事とと
ぶりけ出はみな平伏して控りけり

國朝大業廣記
竹内家武功圖書

一忠勝若年時常差扇指物以赴戰場
大權現曰扇差物者我家之吉例也可獻
之即使長井與次郎調進　かゝる忠勝譜

一勇將ハ若年より格別なるものなり
家康公三州長澤より今川氏を出
一戦のときかゝる年八郎忠勝十五歳
にて初陣なりしに叔父かゝる肥後守敵兵
と突伏せて平八を首とるとゝ云けるに

忠勝聞もあへすに某ハ人のかとたのゝ言
名する事と笑悟せすと云て猛勇
餘りさ敵と討なり是ハ勇士の義と
云つへし　校合雜記　徳川家康公筆記　かゝる朝列侯傳

一一向宗一揆のときさ蜂屋出羽守ゝ退くと服
部半蔵正成平岩七ゝ助親吉退散けるハ
蜂屋出羽守ゝ槍を揮てもとゝ面人柳樹
ある時より家けるハ蜂屋ハとても吾

続いて八成まーさと荒言ー静に退くに弟平八郎忠勝十六歳横合より続と揮て薙り来るを巫返ーて平八退けとして忠勝聞て退けとハ似合ぬ何ぐふと尚すゝんで薙出ハ蜂屋ハ忠勝ゝ壮勇と感ー語りて吾退んとて引去ぬ（弟多家記 大三川志 武徳編年集成）

一今川氏真の士大将小原肥前守三州吉田の城と相守りゆと権現様に攻めさされ人数と二連木かす城者の要害くさいさ出ゆ而に小原肥前守是と見て吉田川の邊下地と而へ出陣戦行りゆ至節忠勝様一番に出かりゆさ小牧宗次郎と続と合せ切さ出ゆ類ゆさゆ切さもて出産ゆとさに蜂屋主ゝ巫ーさ出ゆい

毎度一番槍と突而ハ此度初手ハ越さ
れ二番槍ハ論ぜしとて槍をすてゝ
と抜てかけ入敵二人切伏〳〵出て 切合家臣切聞書

一 駿州今川家の家来城所助之允数孫左
場ハ武遍場数の士あ人也 城所
助〳〵允ハ毎陣ハ桔梗笠と云一出ハ
つさ
権現様氏真と此合戦の節

徳川の康角今川の桔梗笠と世互に闘之
中ハ〳〵康角と中ハハ則ち忠勝様
此事右の孫左場ハ儀ハ毛節より十
五六年も以前相果中ハハ孫左場ハ
岡宗次郎と者二三歳ハ有中ハ
と孫左場ハ妻引連れ駿州のうち五
足引鍛冶育仕りハ宗次郎十八九歳ハ
なりて生亡父の事と母ハ居ハ今

川家ヨリ牧孫左衛門ト申隠士有之、さ
武勇ハ伯ヨリ異名ト称ス孫左衛門ト
申ハ何年以前ヨリ相果申ハヨツ、さ者
五つ迄ハ而ヨリ居申ハ孫左衛門別ト知音
ハ傍輩城而助ゝ元ト申者今ヨリ氏志
相ヨリ而吉ハこゝ州武士ヨリ廉角今川
家ヨリ桔梗釜ト云ハ助ゝ元ノ事也ヨリ依テ
年八郎度ヨリ助ゝ元ト正国ヨリ掛け

助ゝ元ハ如何度ト云ヨリ掛け懸合セん
と互ヨリ春ー此人ハ面家中ヨリ平八
郎度助ゝ元ト大切ヨリ思ヘー当ハいま
ゝ勝頼ハ見ル者さヨリ聞之ハと毋語り
聞セケ迄ハ夫ヨリ宗次郎春ー立殿府
助ゝ元方ヘ参リ孫左衛門殿ノヨリ悔ゝ
申聞セ何卒一度武勇の功ト立申度春
ハヨリ願ハ助ゝ元ヨリ感ー

涙と流し我者一命をかけ西立ヶ下と
絶来るしるを宗次郎ヶ申ハ
さやう思召まゐりゆゑ桔梗釜と申貴
下さるゝゝゆゑ三河流と申合戦仕
あるゝさよしよしハ郎兵衛
と能と合せ申度と望みヶ申ハ伝儀ハ助
元當惑るしるも是非と存申
桔梗釜と宗次郎より貴ヶ申基釜と為仕り

申一戦の節忠勝様とゝ掛果して能と
合せヶ申忠勝様宗次郎と宗伝様首
と申取成さるしると思召桔梗釜と申も
つし申度ハ助ゝ元よりハ申度存
前髪立の若武者よりて申度申ヶ
助ゝ元よりハ是ゝ申ゝゝゝゝるものと
と申石ゝさ生ゝハ牧宗次郎と申者
平八郎兵衛と是及ハ能と合せ一生の名

誉ヨリ〳〵一度帰一結束致シ助ケ元ヨ
無理ヨリ而宗任ヲ借出一出陣仕リ候ヨ一
祢姫ヨリ中上ル人忠勝相竹ヲ千万ト思
ヒ出シテ敗〳〵ハ互ヨリ相退ケ〳〵候シ一
生方武運強ク候ヲ頼ヲ〳〵ク候ヒ分利
運ヨトシテハカ有〳〵ス某ヨリ家〳〵
出シ聊ハ咎ヲ有ル事一〳〵トノハ御来
ヨリテハ引分ヲ出ル有ヲ生ヲ生後今川家没
落仕リ忠勝ヲ家次郎君ヲ奉リ出ヲ
中上ル 同上

一 家康ヲ或ヲ三州鄙田近所ヨリ出陣ヲ
有サレハの節甲州武山縣昌景大将ヨ
リ朝未明ヨリ押ケ寄ケ有大久保七郎
右衛門尉忠世石川日向守数多
ヲ出シ陣ヨリ敵ヲ押ヲ也朝合
戦ヲ仕ヲ一〳〵ト見ヲ早ク出備ヲ出サ

と一と陳ぜる
家康公に使番成二三人に申あさせ味方
さハさせんと に居あさせハに味方
弥の外驚さハよ一ハをとさかを
平八忠勝十六歳なりに僧よりなる
に湯つけとまいるへ一支度仕りハと に
旗方へ仰付させけるに用ゆ成と以て に
鰹ふさせハに雑かと何もお給て出
へく に湯漬とまいり に出成さるとと
鰹けさハに味方何もあつまり敵近く
よせさるよ鑓くと に給と出させハ
如何様に かまへこをあんとく
大勇なる大将なるかやうのとさ成急
さ出たるんハ却て に意よへまさ
とて何も に陣の外張よ給へてあつ
まり居たり主命かを平八本錦の花

色の羽織と為し一藻笠髪にて素槍と
指物ハ為せず先ケ一て敵の備二町
もとりかとに進みけるゝ五月にて
敵へかり場皆水田にて道ハ一筋の
柄と田の水にてあめ一道と石てあか
さこゝゝと畠の中とあり さけると
甲州方色と見て
家康ゝ為まりて只今まて備と出さ

れすハ常に遠ク三川方勝一ゝゝ
やと思ハ一に色非合戦すゝさゝゝ
一里廻引ありあの花色の羽織ゝ
ゝ為ゝりすゝハ方と引かゝへ
さとの事ゝり左右水田にて場あ
さゝり只引取へ一三州方つけゝゝハ
ゝ返一ゝ取へ一とて甲州方畑備者
小菅五郎兵衛等茶幣と取て引退ク

家康ニ外張まて出さまひ一人も敵よ
ケ〳〵す此方と引かくるもりこと
より敵ゝりあの伯れ新と能人を
と仰せ〳〵也此陣取へ入さまよ静さ
よく〳〵敵の様と此覚ゆさ出けを何也
し老功の伯大拙とも一め感一まり却
多年八敵よつさ強武者と対面弥よ初
言給ゝり康角の立物一さる此書と

此義ヲとして此をつ〳〵下さ出ける
とゝり平八前ニとりの事ハを帝まて
ハ若武者よて知さ出とも敵方より
前源りと見さるる人見事ゝ一
甲へと後廣瀬語りけるとゝり
家康ニ対此智謀ハ孫子の所謂遠而近と
ゝすハ義也又曹孟德云治已勝人遅く
て且為早とハひつへ

東照宮此名叢書

一 永禄七年五月十三日吉田城攻のとき忠勝見日三度敵と退くるを以て時人見とかゝる三打返一の越と称す 大三川志

一 伊呂尾よりかゝる中勢より

権現様此方あさ迄ハ付陣ハ退さゝ

〳〵ゆゑ退中まゝ、さゝと此方あさ迄

中勢中上〳〵迄ハ此退、さあさ迄やう

ゝとあり

権現様腰ぬけと此方ありあさ迄中勢

此退事より腰ぬけゆゑ此方あ〳〵ゆと

中そこよりて酒井左衛門と云者〳〵

此中勢ハ退ゆやうゝと中ありゆ何と

此方あさ迄左衛門中上〳〵迄ハ中

勢ハ若く少人とも我者つもりゝ遠ハす

ゆとなりまゝ此退あさ迄甚かり

小一あ一く此方あさ迄中勢中上

らせは私は能く敵を押付と見せやさ
すゆと
権現様へあてゝやりたる中書度年
十八のときさうり　古老夜話

一
姉川合戦の前織田信長より
神君へ加勢と乞ひたる出馬あらへさ
る評定のときさ思勝やさけるは老功の
侍ばとさゝ一番推薦ゆゑとゝもんなる
事更やさ信長とひさすらは味方の
やうに思ひとゝも私はさやうに存
せすおしあゝ敵とも戦死とあさる
やうにたゝまる事うさひちゝは
此度の出陣弾はよ大事ゆゑとや
けるとゝ聞一石別して此ひあさる
との事ゆゑ此人数と態と残さ出て
鑓ヶ三千餘騎ゆゑ面ひさまひ　改定史籍集覽

国立公文書館
National Archives of Japan

君臣言行録

一 元亀元年庚午六月廿八日信長ゟ浅井
備前ゟ之退治のゝめ江州へ進發ゟ
さ出
権現様ゟも加勢として被向被ハ
され同月廿八日江州姉川ゟ之て
一戦に勝利治ゝ出ゟ越前の朝
倉義景浅井加勢として朝倉孫三郎ゟ
人数二万又一説ゟ一万五千指添へ被向仕り候
信長ゟ廿七日の夜敵陣ゟ火と焼
と覚ゟさ出かゝゝす明日ハ朝倉義
景かけ来ゟへ・さと積り諸将と召集め
ゟし備配り仕評議仕候
権現様仰ゝ出ハ朝倉ゟても浅井ゟ
ても一方某儀ハ一と仰ゟ出ゟハ
信長ゟ仰ゝ出ハ越前勢へ向へたまり

也、惟よりても富沢第吉加一中ゝと仰
られさるへハ稲葉と仰付ゝ〳〵と仰
権現様に好よりて伊藤右衛門に後と賜め
られさる越前勢ハ二万に味方ハ五千よりて
に向へ拵ハさせられ小笠原長八郎
酒井左衛門尉よりて既に戦へ始ける
所に浅井長政先手磯部丹波守と五千
除一番よりて信長公に切崩

一坂井右近尉池田勝九郎とも一ツ中
町除敗軍よりて引退さるへハ越前勢是
と見ていさかへ掛り姉川と打越
権現様に先手も崩さかゝり敵一百除一
手よりり退きりける
権現様御手豊後守松平右近将監尉
へに向へ仰せ〳〵さるハ味方東西ともに
利と共へ信長公の旗本も能く見申

百我旗下と以て勝負とするべきと
の仰と忠勝板に聞かさるゝとひそく
に一騎馬にて徒と成に掲けかさる敵陣
一万餘の真中へ一文字に突かゝりか
さる
権現様と成覚めをハさる平八討す
るかを待すすむと成下知かさるを更
二千餘の旗下一同に突掛りに八誠

に勢能に敗軍仕り其柄父子ともに
感くの仕数を討死仕りに成勢に敗て
信長公に本陣迄かく浅井と迫崩に
勝利と沙汰さるに合戦能りて信長公
より
権現様へ今度於江州出群抜華き武功誠
に十高祖百張長き勢功と云ふ国日不可
語當家く綱紀武門く棟梁と見なりに

而感状を進せらる
権現様大に而感状を被遣ハさせ別ち忠勝
様と名出させ感状を下さるさて偏
に生方もなくさらさ申と仰せられさ
ハ一く而称賞被ハさせられさせ
以時の合戦に忠勝様而もさらさの
儀ハ信長公に也而聞及ひあさせ殊の外
而感入あさせ也

本多家武功聞書

一 柳川殿朝倉浅井も柳川と為て
郡村三田村に俗とあす我始めんと世
一而に朝倉の兵百騎ばかり俗と離れ
て横槍と入んと見えけさハ本多平
八郎忠勝二十三歳その様と見て
神君へ上けるハ先二さと進ひ敵一ハ
んとありけさハ
神君也と仰あり忠勝急に沈回て百

弱もとりの敵と即時に退く崩れ

武徳大成記

一 元亀二年三月駿州より武田の海賊遠州掛塚へ渡海し村里を礼物す

神君御手忠勝を以て撃しめ給へんとす時に大河内音兵衛政綱御手を

練めて曰く兵勢を顕はし徒に敵必に引取し旗旗を巻て偽に押掛るべき

の忠勝手練に意し濱松より密に掛塚に取り旗を飜へし敵民区に入て礼物するを思ひまゝに家々

に大に周章し一隊も出す船に乗て逃るを忠勝も岡と叢し海陣せんとするを政綱卿由の海岸を巡視す

るに敵の案内の兵船三艘あり刈ち

こを焼印し引けるを忠勝死来たり

大ニ感シ付捕首二百餘級ヲ指セ遣リ
神君ノ此挙ヨリ傳ヘ　国朝大業廣記

一
家康公信玄ト此對陣ノ時甲州ノ
大軍袋井見付ノ辺ニ来リ
家康公ノ此先鋒ニ加勢ヨリ傳ル
甲州ノ大軍我ヲモ一ノ手ニ成ント
ヨリツヤ　ウハ本多平八郎忠勝敵ハ
大軍ヲ味方ノ小勢ヲ見テ急ギ
戦ヲモヘむへ　さヨリ来ル味方
此後ヨリ　さんとの謀ヲ
進ル軍ヲ迎ヘ一敵モ一来ラハ天龍
川ヲ渡ハ渡ンとさ付テ勝利ヲ
逃ヘ一と中上傳ニ注ヨリテ
家康公前軍ヲ引上ケさせ給ヒ敵兵
果テ喰留ヲリ忠勝ヲ軍ノ間ヨ変

足て士卒と下知し一騎もうたせず
引上りし忠勝二十五歳のときなり
家康ゟ板倉の伯耆守ありて忠勝ゟ合
れもらさ八幡と思ふさるとの
上意ゟ甲州のハくもを雪壮と感
して敵とうつて見ての示よりて
ありし甲陽軍鑑にも見えたる

太平夜話抄

一三州遠州五ヶ国のこゝ山縣ゟ手の人
数にて天龍川近くもるらくとさ
れ節
徳川家の戦士ゆくして戦ひ〻
味方利ありしん事をもり合船に
乗ゟやありけん天龍川を越せよう
ち入けゝ忠勝例のこゝ渡よさりて
只一騎馬とひゝ十間もりおよぐ

而一度より山縣の兵勢百騎もより向と
かけて過かくると見るとハとしく川
中より取て返し一けの兵勢龍神の波
瀾と潮立るとくもけ一さしや陽生
けん例の平八なりと一騎も延合せす
して逃去りける瓦て大河と変越す
る中流まして引返すに成るさすす
るとと忠勝なるらさ兎角筆舌の
及へさるひとあるす

君臣言行録

一
甲州陣より
権現様ハ正軍勢白鷺と以て幟とす此
節本多中務一古渡里の戦功抜群ゟ
甲州の人ハ称よいたく
家康ハすさるものゟ二つあり
唐ハ頭ハ本多平八

駿河章

一 元亀三年信玄遠州へ出張甲州勢勝利
と沼平を皆し討死は濱松勢の引取と
過ぎとて城のうーゐ降かけよて
不案内の甲州勢陥死の者ありは
節度中勢三百騎もりよて静よ
退口見事よる信玄見さまひてあ
れハ武者中勢よてこをめ〳〵ん中勢
ゝ外よあのやうなる仰よて引取ハ

あるまー 討へ〳〵すとゝ知せ〳〵る

武功雑記

一 金谷合戦の節
権現様よハ金谷の巻れ山の上よは陣と
ゆさ出れたんをハかく出あさ勇猛の信
大将内藤四郎左衛つゝり信玄方の先
をハ例の山縣三郎兵衛尉とゝ勇猛多出
互よ面虎のいさましひとあるひをめひ

ろくに一町もとりに行つめ一面に
雑の穂先とかくさかけ少しも色めく方
へたちまちに突崩さるん勢ひなる
四郎左衛門に三郎兵衛を並へ知りより
今日と討死と覚悟とすべき次第ここに
ちかくとて語りいとみけるへ御に
あやうさ事かりはよしと
権現様仰せ被ありさるは味軍に討死とさい

めさるべかりは味軍に討死させ大勢の
士卒を付せて益なき事なるは早く引
あけよと仰せさるさるは仰て使番と
さいさいに互に知らせ一番将の方
合一番なるさいとも孔引せすを勢
金鉄とくくに氣色かり時に小笠
平八郎私兵衛一て引上させ平さん
と一さんに第一て四郎左衛門陣

〈豪〉〈さ〉〈や〉さて豪力〈一〉り金谷の
宿より大ともあり一焼立たり猛煙ハ志さり
よたちのかりとをけ方の中〈さあ
引上ると四郎左衛門と名りける更
煙の中〈雑り〉〈引取〉り三郎兵衛ハ闇の
る間のあるをハ敵もりこと引取
るも知を〈〈し一煙の中へ進入〈つさやう
しあけをハ進討す一〈すと下知して

五より引けり更に日の軍ハあり〈り
り平八〉大と敵ちけるハ古今の武
勇智謀と称賞せ〈ハしけるり内義
し流石より勇士あり平八〉智謀と聞と
急ちん服して内侯一決して引上
けしハ聞甲る智勇の佑りり血氣よて
もやる勇士り〈ハ討死と覚悟するかと
よしハ是非引取まし〈さあり死るとさ

ハ二ヨリ限ラルマシキ軍ヨリ論ナク付
死ヲ以テ士卒ヲ亡サン事不忠トヲ
ヲ以テ為ニ為メトナシ為サルヲ大拙ト澤
山ニ出ダルサヲ出シ為サルヲ大拙ナルヲトヤケ
ヲトヲリ　校合雜記

一
元亀三年壬申十二月廿二日信玄ヲトノ
ニ合戦中ノ別ヨリ軍始リ酉ノ刻ヨリ戦ヒ
終リヤル

権現様濱松ノ城ヘ人数ヲ引揚ラレハ
サルヽトヽサ忠勝拙法師武者ノ首一つ
ニ取ルヽサヲ信玄ノ首ヲ取ルヽサヲ
言聲ヨリ呼ブリルヽサヲ別ヲ実検ヨ
ニ入ルルヽサルヽハ味方ヨリ勢ヒ力ナ
キヲヨリ是ヨリ後テ
権現様ニ機嫌大敗ラ〳〵ス收ヲヨテ
忠勝拙ニ武功ノルヽトヽ感ル拙ハヽサ事

一　元亀三年十二月廿二日上杉忠勝小山田信茂と戦ひ雄雄と争ふことこれ能はず信茂と代攻め山縣昌景色と見て二千餘兵を以て横撃す　我兵の目を絶つ因て甲兵勢ひを沮て退く　会世原石源右衛門尉進んで槍を接す田辺弥兵衛盛昌傷て進む上杉忠勝大須賀康高昌

京と戦ひ忠勝の従士荒川甚左郎上杉甚六郎河合又五郎等門戦中皆戦死

梅井勝次能戦て首級を泊たり　大三川志

一　味方原に合戦のとき

神君小檜に登りまひ敵陣を見給ひ

て上杉忠勝とゆ〻しく敵の氣を知る

やと仰せ忠勝曰ては敵當城を攻る

敵はあ〻すかるすく人数を引揚て

毛利細川大軍の源より輜重を送り軍竈より
烟あがりとやけるを見て信玄甲斐四日
味方原と引揚ひ刑部へ引取る　國朝大業廣記

一　翁曰く遠州二股の城は元
家康公方なりと信玄公の代と
責取さまとなり城とは青木四郎兵衛
といひし者籠り居るとなり城と渡
退さるつさ

家康公青木と思ひ〳〵思ひさるよ
と兼て聞ひより依て毛面目とすゝん
なるよ味方原合戦より能よ討死せとなり
勝頼公代よりなりてまゝ二股の城と
家康公方ゝりとゝんとて甲辰年八
彼城より毛勢と以て堀際まて押寄るよ
城より見付て人数とゝり出す毛趣と
年八見及てるつの勢よりてハ叶ハ難く

思ひけさハ我勢よりハ知りて云く後詰
れ人数三千後の山まで来たりたり爰
と引ハ何も打しけ一戦せんとハ知
りけりと聞て敵人数を出さすして
引籠りたりと見さまひて平八人数
と揚て引取りとあり　翁物語後集

一
長篠合戦のとき勝頼も今ハ家寶の旗
と持て逃るゝ氣力もなく遠よ投り
ゝ

屈昌恒初康郷信古高天正後とともよ身
と脱す昌恒兄直村の死生如何と尋ね
す事二度勝頼又昌恒に尋ねると返す毎よ
兄と憂く書と返せりゝ竟よ昌恒と先く
立て退くハ忠勝遁事為り忠勝の
従士武田家寶の旗と捨ハ梶金平勝忠兄
よ進て呼び縦令大敗すとも家寶成
捨る事ハ〳〵んやと申りけさハ甲兵之

聞さ捨〳〵ゝ旌ハ舊物なり何を惜
んと云ふ勝忠笑て曰く爾ゝ言なりと
塲山縣内義と捨〳〵さゝし古老の呂ある事よ
捨〳〵ゝ〳〵んと同音よ笑ひ出ハ甲兵
相ゝ〳〵して去りぬる　たゝ月志

藩鑑巻之百十五目録

ほ部二十七

本多中務大輔藤原忠勝

国立公文書館
National Archives of Japan